

Leader's TOPICS

ユネスコ世界無形文化遺産 ケナフで和紙の紙漉き

子どもサイエンス部会長・環境カウンセラー 荒谷輝正



ユネスコは平成26年11月27日、日本の伝統的な「手漉き和紙技術」を世界無形文化遺産に登録しました。登録は、島根県の「石州半紙」、岐阜県の「本美濃紙」、埼玉県の「細川紙」の「楮（こうぞ）」だけを原料とした3種です。

和紙とは、明治時代以降に欧米から伝わった紙「洋紙」に対して日本伝統の紙を和紙と呼んでいます。

また、「手漉き」は明治時代以前から作られていた和紙の原料が、^{こうぞ}楮、^{みつまた}三椏、^{がんび}雁皮などの表皮の内側の繊維（靱皮繊維）を主原料として「手漉き和紙」と明治時代の後半から生産された機械抄（す）きの和紙（手漉き和紙を模造して作った抄紙機によるもの）を、慣例的に「漉き（すき）」という漢字で使われてきました。

塚原田から見た和紙の特徴としては、

- その年に伸びた部分だけを、紙にするので原料が無くならない。
 - 天然の素材を用いるので長持ちする。1,000年以上保存した実績が有るようです。
- 一方の洋紙は、広葉樹、針葉樹の木の皮を除去した幹の部分、木材そのものの木質繊維（木材パルプ）などを主原料としています。【右の比較表】にあるように大量、安価に供給することが可能です。

筆者が子どものころに山から雁皮を採ってきて、皮を剥いて、池に入れて外側の黒い部分を取り、買いに来た小父さんに買ってもらい小遣いにしたのですが、現在では和紙の原料の楮、三椏、雁皮などは殆ど見ることはできず、技術を維持することは難しいことです。

これらの材料に代わって、容易に提供できるが一年草ケナフです。毎年、春に種をまき10月には収穫して「和紙の紙漉き」手法で紙を漉く方法は、原料の供給を容易にし、登録理由の一つの

「教育現場で手漉きの体験活動を行う」ことにも貢献できると思っております。

■和紙工房で紙漉きする筆者 ▶



和紙と洋紙の比較表

| 和紙・用紙 | 和紙 | 洋紙 |
|--------|---------------------------------|-------------------------------------|
| 主な原料 | 楮、雁皮、三椏(靱皮繊維) | 広葉樹、針葉樹(木質繊維) |
| 紙の強さ | 強い | やや弱い |
| | 繊維が太く長い為、強度が高い | 和紙の原料に比べて繊維が細く短いため、強度は劣る |
| 保存性 | 高い | 低い |
| | 原料に紙を弱くする成分が含まれておらず、繊維を傷める工程もない | 紙の劣化をすすめる成分も多く含まれているため、変色や変質がおこりやすい |
| | 1,000年以上保存の実績あり | 酸性紙なら約100年、中性紙は改善されている |
| 生産性・原価 | 原料に限られ、生産性も低いため、高価 | 機械で大量生産できるため、生産性が高く安価 |

参考文献：紙の博物館「和紙と洋紙 -その類似点と相違点-」 / 「わかりやすい紙の知識」